十役之抄 一

序跋

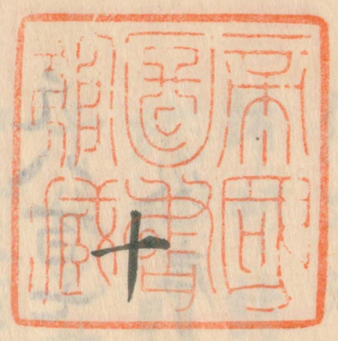
848
189

峡
天

国立国会図書館　タイトル『十役之抄 19巻』 請求記号 848-189

ガラス使用

848
189



十役之抄

自解全部
十九冊

国立国会図書館　タイトル『十役之抄 19巻』 請求記号 848-189
ガラス使用

凡八百七十箇條　但本章二百有一箇条
附章六百六十九箇

外序跋等有之

有澤武貞作之

848
189

# 十役大意

夫士之所勤者雖有許多品於本朝
從大永天文之頃到于慶長元和之間
諸邦諸家漸武備之各目定也就中先
統計則據甲陽武田家之軍法豫箕而
十役也故十役之抄編於十卷也外亦追
加三卷者可通於諸役者也猶可格勤英
雄豪傑之大基但可棟梁將士歩卒及
三民之施用握機者述于前後篇二卷也
其主意者出于序跋等之一卷也各分

国立国会図書館　タイトル『十役之抄 19巻』 請求記号 848-189
ガラス使用

章爲附章以加自解者也從享保初元
到七年終之云爾

成編輯

848
189

十役大意

十役之抄

序 凡例 目録 跋

合成 全

国立国会図書館　タイトル『十役之抄 19巻』 請求記号 848-189
ガラス使用

凡此一巻者
序 自註凡例 自註凡例目録 自註之次第
跋 自註之跋
右合成

享保七壬寅三月上旬

伯斉作之

# 十役之抄序

文武備定用治世ニ考ル時ハ當時ノ長法ト旧法ト
聊迷フ所ヲ生ル故解キ難シ いくゝ急務ヲ取
合ル事叶ハシ

夫當世ノ武將祖考ノ議リヲ受テ其国郡ヲタモチ
社稷ヲ守リ太平ノ代ニ生レテ三民ヲ撫シ兵器ヲ庫
藏ニ滿車馬運送叶ヒ軍用不闕カ如キヲ實ニ備ルト
思フ者ヲ考見ルニ治世ノ旅行ハ前ニ敵ナシ国郡ノ主
我領内ヲ打立時家中ノ士卒未ダ迄老若愚蒙
病脳ヲ除テ壯年強仕ノ才士ヲ撰ミ役人トシ下ニ迄
健力ノ者ヲ以歩立ノ用ヲ達シ連出一日ノ行程ヲ定ノ
小荷駄雑人ヲ先ヘ遣シ資用財具ヲ跡ニ運ニ前

後ニ恐レ者ナク自他国ノ隔ナク日暮レハ宿陣ヲナシ
糧米・薪芻ハ行先ニ貯ヘ待駅馬往還ヲ傳テ寒暑
飢渇ノ愁ナシ如此自由ヲ得トイヘ長途ノ旅行ハ常
居ト不同山坂ノ巖石或河海ノ深廣ニ至テハ兼テ定
ムル行列作法モ散乱メ調難ク増テ大風甚雨ノ
天変ニ及テハ車馬行路ニ苦シミ橋舟通達ヲ絶テ人
馬ノ気疲ル力尽食物ヲ求メ兼或渇ヲ凌キ難リ
其難渋尋常ナラス爰ヲ以戦国出軍ノ用法ヲ案
スルニ戦国武将ノ人数ヲ出ス期ニ至テハ其勢ノ多キヲ
要トス故ニ士ハ大中小身皆分限ニ応シ領分ノ人数ヲ
揮テ百姓ヲ以士ノ奴トシ或ハ時ニ至テノ今ヲ出シ列ヲ整ヘ
出ルトイヘ治世精撰ノ侠人トハ可違備押何備ニ

至テ敵ヲ窺ヒ郷民ヲ気遣先ニ遣ス小荷駄モナク跡ニ
残スヘキ道具モナク陣スル時ハ在家ニヨラス行路駅馬
ヲカラス粮食持運ヒ薪芻尋求山林険隘ノ地ヲ
過ル時ハ敵ノ伏兵ノ不意アランカヲ慎ミ俄ニ備ヲ敷
道具ヲ配リ戦ヲナスニ至テ無滞様ニ其利ヲ得ル心
得ヲナシ陣スル時ハ敵夜討朝懸ヲナスモ其不意ニモ
不撃カ如クシ出備ニモ其法易ク整ルヲ以軍法トシ
難所ヲ越或ハ風雨ノ天変ニ逢テ其労苦ヲ息ル所
所ヘ敵可来カノ防キ怠ナク然而其動揺遅キ時ハ
利ニ不及ル早キ時ハ人馬不続ク陣具兵粮不足時ハ
士卒疲レ惟幕財用安侠ナルハ上下怠ル故ニ其
節ヲ計テ動静其利ヲ得ル丁庸才ノ世將ノ及難キ

国立国会図書館　タイトル『十役之抄 19巻』 請求記号 848-189
ガラス使用

変ヲ知当時ニ兵法ヲ説トスル者是ヲ云トイヘ共高遠ニ
馳テ實用ヲ失フニ似タルヿ多故ニ其説ル処ハ平常ニ
戦国ノ跡ヲ紀シ知テ治世ノ今トイヘ百余年前ヨリ
移リ来ル処ヲ合点シ聊モ武備實用ヲ不失ハ急
務ナリ易キ道シ
抑兵法武備の大元ハ云ハ其元ハ成敗有常
制ハ変化有数量有時勢有教法有實体ハ
此四對ハ又ハ有澤永貞作スル甲陽軍鑑之備拔ノ
要抄ニ出ス武備ノ八元シ於兵法此八ヲ不辨ヲ
迷フ所多シ
其本体ハ天地自然の原理に基く陰陽三
才に成ハ陣乃理体なり家乃盛衰軍花向

背不ニ疑の矩規論をなす物多
和漢ノ兵書此所ヲ而已論スル者多シ然ニ偽説妄
説多シ二ツヲ以勝ヲ取ヲ陰陽トメ奇正懸待ノ法孫
子ヲ始悉兵書ニ在トイヘ其實ニ至ル所ハ更ニ明ニ
シ知ヘシ甲陽ノ余風ヲ汲ノ学者モ訛ル者ハ迷ニ多シ
五行四時ノ盛衰スルカ如ノ天下国家自然ノ盛衰
是本元ノ天道ニ據テ知変軍配ノ直指
本朝一箇ノ秘説ヲ知テ既疑ヲ散スルハ
神武ノ本元シ其規矩アル変シ物更ニ本元ナキ
変アタハス是ヲ知ヲ甲列流本有之曲尺トスシ
主成敗をいへを本元ハ紀知やきそおのをヲ
ヨ定むへ変不背国那大小乃差別ヨ叶姫乃

法を又不二の疑し
タトヘハ甲刀流ニ論スル処合戦ハ二ツニテ必勝トスルト
大小ニ不因必一手ハ敵ニ向ヒ一手ハ跡ヨリ新手ヲ以勝ヲ
取トスヲ成就ノ法トス遠クハ中華ノ奇正ノ法アル是
然ル時味方備ヲ敷ニハ三段ニ立テ陰陽トリト定ムル
是三才ノ陣法ニ拠テ甲刀流ノ定法トスルハ十人共人ヲ
以モ三段トシ五万十万ニテモ三段ト定ムル是未書結
要本ニ委出之則四武ハ陣ノ法ニモ叶処ハ明し或
敵配味方配ノ釣合或敵味方ノ盛衰等ヲ知
宜ヲ定ムル是皆本元ヲ紀メ成就ヲ定ムル処
アルし更ニ其書ニ拠テ明矣し可し知
主常制状ニ付ハ本元武の法定とり後国

郡の主将士を注に合せ国法軍法常とり
ハ一状ニ甲列流ヨリ武器セニ付
タトヘハ信玄公五六ケ国ヲ取鋪トキ四境ノ敵ニ對メ先手
ノ備頭ヲ定其ヒノ士卒ヲ置七段ノ備ヲ極メ歩卒ニ
至ル迄ノ法ヲ立国中ノ法度陣中ノ法度以下備立行
列陣取城取時節相應ヲ定ル処未書要本ニ出
ス処ヲ見ヘシ猶ニ時ハ十万ノ人數ノナラシ或天下ヲ
治ムルノナラシ等是第テ定ル武略ノ習シ是ヲ不定
シテハ変整ヘカラス
主変化状ニ付常制定ク後ヨリ時の様子ヨリ
遠ク大主常制四一きヨリ変化ハ面会
安状ヲ知ル事なれ

変化ニ大小有ルシ右ニ云 信玄公四境ニ出陣ヲ被
置ニタトヘハ三増合戦ノ時ハ秋末ヨリ出陣故高坂
弾正ハ越後謙信公ノ歴ヘニ信州河中嶋ニ残リ
出陣セス味方原合戦ニハ冬ニテ越後ノヲサヘ不入
シテ高坂モ出陣 関東筋ハ北条家ト和談ニテ
歴ヘ不入濃州ニ焼山伯耆守一手オサヘニ残ツテ
先手八人ノ内七人ハ出陣スルトカ如ク時ニ因テ違有
或小ヲ以イヘハ侍一組何十騎ヲ何様ニト定ルモ時ニ
因テ不同モ可有カ如ク或一二ノ手合戦進退相
代ツテナス 敵戦場ノ変化定ノ難キ中ニモ常制正
キヨリ出ルノ変化ハ取合仕安キ 夏遠クハ孫子ニ
モ論之然レハ大細夏ニアル 夏ナレハ常変ノ二ツヲ知ルヘシ

主 数量ハ必那の大小に因て地ヨ立ての人馬
必規矩ありて是ハ集て主類を分ち一人乃下知
の乃人をはうつ大将頭吉行役人ハ定る事し
国法軍法ニ知漢古今五人ヲ以一ツニ組其組合ノ
頭ヲ定メ五ツ廿五人ニ又頭ヲ定頭ニヨリ寄テ股ニ
大頭ヲ添或国法軍法ヲ弁スル役人大小諸奉
行等ノ掟品ハ替リテモ無テ不叶夏し然ニ其本元
ヲ計リテ感之常変ノ二ツヲ分別メ夏ヲツカヘサル様
ニ分数スルカ国法軍法整タルトカヘキし 地ノ廣狭ニ
依テ生スル処ノ食物ニ積リアリ其食物ニ因テ人
数男女ノ考アリ総人高ニ定リアレハ軍役ヲ数ル
夏又定数アル夏し是皆自本元紀不知ハ不可叶

其時勢ハ云ハ自ニ本元ニ以下紀知セ云ヒ 和漢
古今移革ル勢ひを其時宜ニ叶ふ様知(ル)
数量ヲ知テノ上ニ時勢ハ古士農分レサル節ノ変ヲ今
ニ見テハ違ヒ遠キ中華ヲ後ニ見テハ違フ其違フト
見ルハ時勢ヲ不知ト不違ヲ悟者ハ本元ヲ不失リ
兵器等ニ至テモ日本ニテモ上代ト今ト違フ當時ハ
鑓鉄炮弓等入交ルノ作法近代戦国ノ余風タ
リ其定規ヲ知ヘシ或国法軍法モ古ト違フハ時風
ニテノ不違ハ本元ト其一方ヲ不見本元ノ定規ヲ亭
此曲尺ニ合セテ時風ノ善ト思敷トヲ安ヘ悪キハ紀改
メ善ハ用テ時ノ宜ヲナスヲ時勢ヲ知タルトヲ者ニテ
更ニ可知甲冑流膝ノ曲尺トヲテ傳ルノ心是ナリ

其教法ハ云ヒ此時ヲ此断ヲ以テ第ヲ作法
ハ定ムヒヲ不大小事ヲ
国法軍法ニヨラス前跡アル変ヲ紀知時所位ニ應
メ施用ヘキノ矩ヲ以テ定メテ效トスルヲ云シ然ニ其
教法ヲナスニ正道ノ本元ヲ知テナスヲ以善トス治
士ハ其本元ヲ不正時勢ヲ不知メ虚妄ノ教ニ迷フ
者多シ増テ国郡ニ主將タル身ノ妄説ニ迷フ程ノ
庸主將ノ支ハ不及ヲ其下ノ頭奉行役人等武
家ニ属スル者武義ノ正道ヲ外ニナシテハ何ヲカ
勤メ何ヲカ爲シ其教ヲ下スノ常制ノ外ニ勤
爲ノ例ヲ以教法トス必教法モ實ニヨルノ教法ヲ勤知
ヲ實法ハ云ヒ者ハ云ヒ此の七乃刑紀知セ

手實事ヨリ如ク必ス希方なり[illegible]
分も事不整者と云事一第ニ可察し
国法軍法ニヨラス兼ル心ニナラスノ半分モ實ニ
至テハ不整者し一身ノ覚悟サヘ如此益テ多キ人
馬ヲ調ヘ生死ヲ掛タルノ勤ハ心ニナラシタル半分モ遂
難キ事甲陽ノ書ニ明シタトヘハ武書下巻中ニ
合戦初マル相色ノ事ヲ云ニ鉄炮足軽ニ五十間テ
玉ヲ放セト云付レハ二町程ノ敵合ニテ堪兼放ストし
上方辺ナトニテハ十町内外ノ敵合ニテ放モ有ト云
是ニテ可知五十間トアルハ教法ニテ厨戦實ノ模
様二町トアルハ是兼し練タル兵ノ験是ナリ然レハ
戦国ニテサヘ練兵教法ノ定ハ實ノ容ヨキナレ治

世ノ国法軍法共ニ教法ヲ練テ武義ノ正道ヲ不失
時ハ實ニ至テ施用ル処半分モナクに教法ナキ
ニハ益し事十倍ナルヘケレハ法ハ教ノ不倦ノ中ニ實
体ノ宜キ顕ル事必然ナリ是ヲ以知テ余事モ類スヘし
故ニ匿し た教法制改令ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
の規矩ハ不外此の武士ハ
治世ノ時勤ル諸士紛然トメ其勤ルノ度ヲ失フ此段
ニ當テ何等ノ職役ヲ勤ルに本意ニ叶フヲ思フ者ハ
此ハ元ヲ糺知テ當然ヲ不可失ハ元ヲ縮メテ(ハ本
元ヲ以常制數量教法アリ當然ヲ云ハ成就変化
脫勢し實体ハ其當然ヲ云し

を本元當然よふ迷理の有覚ゆ郎の武士ハ
戦ひ中くも名化と称し（仁）を将乃上ゆく名将と称し
ゆ郎事ハ先学孫子書孫子事ハ書孫
結要本等に心に有蹈静ノ道理に徹シタル雅性剛
キハ大身ハ名将小身ハ名仁ト称スル支ハ委出之更可知
治世武家ノ属ゆ郎の大中小身責くハ主ハ
ハも知人と郎世者ハ心掛の武士に近ゆ郎へきも
當時を主心掛乃影響施主の本を見くか
た事ハ用く青ハ主事に携郎ん志の
掛ハ用ゆ者むとゆ郎へきなり
百余稔ノ太平に勇剛ノ顕ス支ハ断絶シ責テハ国
法に不背或役儀に因テ忠義ノ盡スヲ以責テ武

士ノ本意ヲ遂ルニモ近キ者粗無ニ非ス是内ニハ顕ス
ヘキノ本意ヲ含外ニハ可施ノ一端ヲ嗜ムモ云ヘキ
カト武負試ニ論之
抑世に戦世ゆ郎ハ治世ハ可用の国政と不離
軍政を當然し治世にハ国政さへ疎くかく軍政
ハ心ハ不置し古法ハ不謂ふ戦争の日投守文
乃模ゆく治世戦世不忘といへを事業と守文
の発ゆく草業惟雅守文不易ゆく
戦国ニモ国家ヲ治ルノ支ハ不離トイヘ武備闘
爭ニ利ヲ得ル支ヲ第一トスルニ因テ戦国ニハ我ニ
頭ノ民ヲ掩ふスルヲ専トスルヲ以漢ノ高祖ノ恣度
大本三ヶ条ノ外ハ不摘カ如キモ時代隔リテ学文長

国立国会図書館　タイトル『十役之抄 19巻』 請求記号 848-189
ガラス使用

シ法令定リテ漢ノ法式又後世ノ拠トメ唐令ノ起ルモ
漢ノ代ヲ以本拠トシ周ノ八百年ノ令ヲ本旨トセルカヽ
如ク草業ヲ開ク貶ト守文ノ時移ルト違有之変ナリ
於テ此ノ治国守文ノ代ニシテハ前例ヲ本トメ當貶シ
勢ニ因テ施ヲ云トイヘ武備ノ本拠薄クナルハ世替リ
時移ツテ士卒禄ヲ世トシメ英雄進日薄ク商家ノ
英雄日ニ長スルヨリ士家ノ權ヲ失フハ守文ノ時移
ルノ故ニ此時戦国三民ヲ撫育ノ味方ニ属セシメ
シトノ法制厳法ヲ寛有アリシヲ本元ニ拠テ年
ヲ遂テ元政ヲ以定規ヲ押テ本元ニ返シ武備ヲモ不
忘ヲ示シ或時ニ国家ノ盛衰ヲ考ヘ衰ヘメルヲ
補ヒ過シタルノ押ヘ又ハ醫骨ノ人ノ病ヲ補寫

スルカ如ク常ニ油断ナキハ守文捉ノ當貶シ然ニ乱
タルヲ治メテ四民ノ用ヲモ足シメント急クヨリ草業ノ
主ノ誤ル処モ不少是ヲ受續シ給フ守文ノ主
ノ因テ来ルノ誤リヲ改メ兼テ治世ニ変ノツカユル
変モ不少此境ヲ思案工夫分別メ其宜ヲナス
者ハ古今ヲ鑑ミ天地ノ造化ニ先立テ知ノ法ニ
拠テ本元當貶ヲ不迷ノ知覚ニ至テハ何ソ一已ノ
身トスル其職役ニ宜キハ可行増テ天下
国家ノ主將ハ其分限相應ヲ施シ玉ハサル(ケンヤ是ヲ
時勢ニテ不叶ト思フ者ハ大中小身共ニ唐愚ニ開屋
政春文ヲ肖者ナレ草業ハ上戸ニ酒ヲ進ルカ如クヨカ実ヲ
ハ知トイヘ當然ノ心ヲ慰ルヲヨシトス守文ハ小児ニ灸ヲ

国立国会図書館　タイトル『十役之抄 19巻』 請求記号 848-189
ガラス使用

スユルカ如ク啼ロメクヲ可厭ナレ共、後ノ息災ナラ
シヲ悦フトゝシ是ヲ以思ヘハ當時ノ治世守文時久敷、
キナレハ折ヽ炎治ノ心持ナクテハ人ヽ心得違ヘ有
ヘキカ然レハ草業モ守文ハアリ守文モ折ヽ草業ノ
心ヲ用ヒ変ナル変ヲ用テモ畢竟本元ノ道理ニモ至
ルヘキハ改直スヘキ変シ世諺ニゝ千足ノ鼻欠猿ノ
中ヘ一足ノ鼻全キ猿入交リシニ其鼻ノ有ヲ毀笑
ニ困テ鼻アル猿交リ難ク逃退タリトゝ是時機相
應ヲ不知シ又釋迦ノ説ニ小児ハ黄金ノ貴キヲ不
知故ニ金ヲ以柳葉ノ形ヲ作テ柳葉トメ持シメ
畢竟金ノ貴キヲ年長ノ自ラニ知カ如クニ教施スヲ
時機相應トゝ此如クニ教ヲ施スヲ時機相應トゝ

此如ク守文心ハ有ヘキ者シ故ニ基ヲ紀セハ權ニ法ヲ設テ
ナリモ善道ヘ誘引スヘキト思フハ武士互ノ本意治世
ノ本旨爰ニアルカトゝ

吋今治世守文革命の代ゝ武士の本意亡失
革命ハ守文ノ内ノ草業ノ時至ルヲ物百年ニシテ
改ルハ天地ノ気候サヘ如此シ蓋テ人世百年一統ノ
太平和漢其證モ少シ此節一度武ノ本旨ニ心ヲ頓ケ
治世ノ時武義ヲ不亡失ノ本義ニ叶ヘハ天地ト共ニメ
天下国家長久ノ基ヒモ主ハ將士卒ヲ以將タリ主タリ
故ニ士卒ノ武家ニ屬スル當世ノ本元ヲ紀メ當然ニ不
迷ハ三民自ラニ豊ニメ天地ト共ニ長ク四時ト共ニ不
可絶此境ヲ知テ責テ一人志ヲ立ハ同志ノ人有シニ

又同志ノ人出来ナハ共ニ計知テ長ク国家長久
ノ基ヲ開キ三民ヲ安堵メ當世ト共ニ身ヲ終シハ、
幸甚ナランカ
於ル此ノ佐々木四郎左衛源秀乗十役之抄仕畢
也 男子ヒとし
右ノ様子ヲ思フカ故カ治世ノ諸士ニ責テ先祖ノ者ヒ
戦国ニ骨折タル支ヲ可思此十役ノ間ヲ勤テ人
人子孫ニ世禄ヲ遺ス支ト思ヘトシ佐々木四郎兵衛
ハ其始ハ河嶋三郎兵衛ト云小幡勘兵衛景憲ノ
門弟ニテ城取一番ノ秀才ト称スル者ニテ甲府君綱豊
公ニ奉仕ナリ永貞カ師ナリ 元禄四年六月四日病死ス 其子大学之助高乗其跡
當時御旗本ニ有之ナリ 真書生涯ニ是ヲ果サス

主後有沢永貞十役之抄仕畢也 男子ヒとし 不類
十不伝深秘ニ〻〻〻

當流ノ家系ノ故城述ヲ編ス當時の世系武賀
と同一なれとも国の者ニ者の者二ハなりと不離其
身の者子孫の者後代ノ者ハ武賀也疎さん花の志を
以て責ハ指掌る縁を不汚者と当時の同輩ハ
後指ハ掌ねの新ニ事一世ハ要中ニ
右本文ノ外ナシ後世ニ名ヲ残サント志ス者ハ責テ當時ノ
食禄ヲ空クスル者ニ非スト十人ノ指サス所必後ヲ厭
フノ情ヲ恥シミ思フノ便リシ
於ヲ此天ナ新ル今茲享保七壬寅年三月九日
序之ヲ

正德六丙申年六月朔日享保初元至于今歳七ヶ年ニ
成就ス是天ノ武負等カ願ヲ成就セサシメラレシ必ト歓
喜スル処ヲ云テ序トスルノ外他意ナシ意シ注解ヲ
加ル者ハ本文ノ不足ヲ補フノ爲ハカリ也

賀列金澤乾隅堀川旅栖亭作ル

生国賀列金澤ニ武負住スル之地堀川辺トハ浅野川ノ
西岸金城ノ乾隅ニアタルナリ栖老亭ハ武負カ筆書ス亭
号ナリ

有澤平武負書之

国立国会図書館　タイトル『十役之抄 19巻』 請求記号 848-189
ガラス使用

# 十役之抄凡例

一　十役之抄作せんと思ひ立て作る事
葉しも古代より十役の名ハ世道なりと
云ハ有ん永貞し主奉目附章状を新
御状記ハ武貞の作し秀吉ハ治世の士
武国の抜を知る以前時用抜と勤る者
と対ふ主事粗と永貞の心ハ近来
の事除状抜として主職役の心定と主
き事を集めんとし今武貞作を新ハ右に
云ふ状不残也　抜本元書を以て知き
要中を記者し

一　永貞云ふハ十役の名目を武貞加の三

巻物海一冊花帯後五編物なを見て通
しる大概の海を見て考し
一惣部の帯後也ハ有へき人々勤る役々の
事物海一冊分ル 武士ハ平時
なを使者ハ若者の役し六番ハ功者の役なを
旗事ハ或長柄事ハ物見事なを目付ハ法人の
番所物見の役し徒歩中間ハ人物を配
事れハ部武者 組武者ハ士一組ニの部武者
組子の番所を手次の心より心得用る役なり
徒又生地大将といへハ戦法を掛くい迫合定
地合の指図物持役なを士大将ハ指図戦場
国家治乱の機より部武役し故ハ次第物武負



物武役ハ役之是無粗を軍戦中一の要治乱ハ
なるし事なれハ一役ニこのとなれ武家に属
生死の類ひ色ハよるまれハ故ハ諸役
通を示陣場事ハも備物器ハ生地の利
物知の職し番備物事ハ部物なを
諸役ハ通ハ徒ハ何ハ類ハ不なれ役
人も武家ハ役部の者を番海を此三等ハ
追加ハ別ハ列ハを ハ武士ハ幼若の時ハ
志物而立ハ不叶ハ有ハ手法を前篇ハ出ハ物
ハ将の指ハハ諸役物統掌部の下後篇に海を
手番後篇人別ハ事部ハ
番物ハ云事の不ハ分部ハ

進加而後篇たよ貫通しく知者を心掛し假ハ
藩士ニ云用人ハ之将士幸皆篇を使者の用に
勢を使の心掛ハ編人を所を例しく一役之不
限を類しを編をふ所ハ知へ者し然ハ一役ハ
も一役全ク勤ラ事心有しものなり

一 巻ニ代第一第二と挙用ハ之ハ之不の遠を
抄云 附章ハ第三ハ第四の用ハ
於しく本篇のみ一定不の遠を挙ハ之也
辞ハ本章ラ附属ものなり
右正徳六丙申年但六月享保ヨ改元ス春正月十役抄と輯作
せし事ハ心定めの時凡例ハ仲
有澤平武負印

十役之抄自解凡例

一 十役之抄挙目附章巻ニノ品類ヲ分テ此之真論用ラ立
ルトイヘ思ラセル処ノ者日ヲ積歳ヲ重ネテハ始ノ思案ニ
夫セシ趣ヲモ忘失セントヲ惜シテ分別メ其有増ヲ自
記スル物ヲ集テ再書ノ編集スルヨリ武負カ自解ト号
スルハ後来ニ前ニノ非ヲモ糺サン爲ナリ

一 自解ニ引用スルノ書目ハ不出之其所ニテ知ヘシ甲陽
軍鑑末書結要本等ニ始引用ル諸書多シ其夏ラ
粗ノ書タルハ則末書ニ譲ル委知ンニハ更ニ其書ヲ披テ可閲

一 自解ノ内更ニ知ヘシト云ハ一重ノ書残ス所ニシ或一流ノ秘
傳或其所ニ云尽スニ不遑トキハ如此ノ書法トス

一 自解ノ内引用ル処ノ本説證説譬説等ヲ分テ可知ナリ

国立国会図書館　タイトル『十役之抄 19巻』 請求記号 848-189
ガラス使用

諸書諸支迹諸世諺諸傳話等一ニ其所ニ明ナリ

一 自解ノ内文字ノ正邪ハ魯魚烏焉馬ノ訛多カランハ墨附ノ紙數 許多ヲ武負一筆ヲ以草稿果成ヲ要トスルヨリ紀明ノ期ヲ不待故ニ多年ノ精力唯此書成ン支ヲ耳思計シ

一 一卷ニ〳〵ノ尾ニ艸稿再書ノ日次ヲ書スル者ハ前年未熟ヲ後年ニ爲知シ

一 自解ノ内ニ於テ尤可ニ秘支ノ趣傳来ニ基ニテ武負カ新ニ工夫分別メ先輩未タ発見セサル品〻ヲ説得シタル所ニ多シ故ニ此於自解全篇他ヘ傳ル支ヲ甚惜ミ思フ故ニ本文計リヲ傳ヘテ人〻ノ志ヲ講論シ武負カ工夫セル趣ニ雙ヘ競ヘ其勝劣ト當否トヲ知ン支ヲ本意トメ此抄成シ

一 自解ノ書成テ紙數多キハ分テ上下兩冊トス、士大將之卷兵糧方之卷小役人之卷各上下トス此序跋等ノ卷共ニ合テ十九冊シ

右此八ケ條ハ自解ヲ作ル趣シ享保七壬寅春三月十日有沢平武負書之

# 十役之抄目録


一 諸士之卷　凡二十三章　附章四十四箇　一冊

使番之卷　凡十五章　附章三十八箇　一冊

武者奉行之卷　凡十章　附章三十箇　一冊

合六十七箇條

合五十三箇条

合四十箇條


国立国会図書館　タイトル『十役之抄 19巻』　請求記号 848-189　ガラス使用

一諸之旗奉行之卷　一冊
凡十章　附章三十一箇
合四十一箇条

一鑓長柄奉行之卷　一冊
凡八章　附章二十九箇
合三十七箇条

右武者奉行旗奉行鑓奉行三役通スル支有之

一目付横目之卷　一冊
凡八章　附章二十六箇
合三十四箇条

一徒頭中間頭之卷　一冊
凡七章　附章十八箇
合二十五箇条

右目付横目徒頭中間頭使番六奉行通スル支有之

一組頭番頭之卷　一冊
凡十八章　附章五十箇
合六十八箇条

一足軽大将之卷　一冊
凡二十五章　附章百四箇
合百二十九箇条

国立国会図書館　タイトル『十役之抄 19巻』　請求記号 848-189
ガラス使用

一侍大將之卷　上下二冊
凡二十五章　附章六十三箇
合拵十発箇条
右是迄十役ノ此次追加シ

一兵糧方之卷　附小荷駄方　臺所方　寺社方　上下二冊
凡十二章　附章六十九箇
合八十一箇条

一陣場奉行之卷　附普請方　作事方　一冊
凡十章　附章六十箇
合七十箇条

一小役人之卷　上下二冊
凡十六章　附章六十五箇
合八十一箇条
右是迄追加此次前後篇ノ

一幼若之士之卷　是前篇ノ　一冊
凡七章　附章十九箇
合二十六箇条　是後篇ノ

一主將之卷　一冊
凡七章　附章二十三箇
合三十箇条

国立国会図書館　タイトル『十役之抄 19巻』　請求記号 848-189
ガラス使用

右是迄十役之抄十一冊并追加五冊附
前後篇二冊合十八冊

章數通計

凡二百一章　附章六百六十九箇
合八百七十箇条

一序跋之巻　凡例目録　一冊

右之件々

都合十九冊

右恒享保元丙申年至七年壬寅春大成
有沢平武貞　編輯之

十役之抄自解等出来之次第

一正徳六丙申年（是歳六月朔享保ニ改）春四月中旬二ケ日ノ間服ニ
此書ヲ作リ人事ヲ要セシ〻凡例等ヲ綱ス二月三日
諸士ヲ老ヲ挙目ヲ叶稿ス享保初元丙申年九月
下旬三ケ日の間ヲ使者ヲ老の挙目ヲ叶ス同時三ケ日
の間に生駒大将ヲ老乃挙目を草ス同年十月十
ケ日の間ヲ使者ヲ老ヲ自解草稿ヲ同月十七ケ日の
間ヲ足軽大将ヲ老ヲ自解叶稿ヲ翌享保二丁酉
年四月三ケ日の間ヲ武者奉行ヲ老ヲ挙目自解
ヲ草ス同月三ケ日の間ヲ徒者ヲ老の挙
目自解ヲ叶ス同月四ケ日の間ヲ鑓長柄奉行ヲ老
挙目自解ヲ草ス同月二ケ日の間ヲ目付稿目

ゝ毛の筆自解たよ草と同月三ヶ日の間と徒頭
中間頭ゝ毛筆自解たよ艸と同四月の交十ヶ
日の間よ組成義ゝ毛の筆自の草自解乃艸大
下旬同時よ一ヶ日長崎方ゝ毛の筆自成草ス四月の
交六ヶ日乃間よ長崎方ゝ毛自解の草稿出ス成後
三月下旬三ヶ日の間よ陣場ゝ毛筆自の艸小
役人ゝ毛の筆自乃草成ス軍役の事成二夫
て毛筆六月ゝ月ハ毛書成編輯よ脈を費ス軍役和
漢古今通解成武負作ゝ毛後又武負孫子講註を
作ス毛事に間ゝ二三筆の服ナシ後享保之庚子年
正月十四日ゝ二月十日ゝの内十四ヶ日の間ゝ毛
大將ゝ毛自解成再書ス同年十月晴ゝ六日ゝの

内十ヶ日の間よ組義ゝ毛自解成再書ス同年十月廿
日ゝ十二月三日ゝの内八ヶ日の間よ使者ゝ毛自解成再書
ス同月四日ゝ十日ゝ乃内九ヶ日乃間よ武者ゝ毛自
解成再書ス享保六辛丑年正月七日ゝ十四日ゝの内八ヶ
日の間よ諸ゝ藩ゝ毛自解成再書ス同月十六日ゝ
十日ゝの内四ヶ日乃間よ藩長拓ゝ毛自解の再書
同月十二日ゝ十四日ゝ三ヶ日の間よ自付橋ゝ毛自解
成再書ス同月十六日ゝ二月三日ゝの内三ヶ日の間よ徒成
中間成ゝ毛自解成再書ス毛ゝ再書成ナ毛ゝ艸
稿よ粗ゝ考成事成再書の時ゝよ精ゝ毛取ゝ毛
自毛ゝ毛艸稿ゝ毛ゝ以ゝ自解成ナ成ハ迄年考
かの成類成ゝ毛ゝ書依ゝ草稿再書の巻

国立国会図書館　タイトル『十役之抄 19巻』 請求記号 848-189
ガラス使用

別帳ニ記し故ニ同年二月朔日より四月二日迄の内廿一ヶ日の
間城内ニ士大将ニ毛自解書之但拳用も仕ル
ニ付ク立之ニ同月三日より廿三日迄の内十三ヶ日の間ニ諸士
ニ毛自解書ク但拳用ハ先年定ル所ニ同年四月
廿四日より九月廿日迄の内廿七ヶ日の間城内ニ番頭方の
毛自解書ク但拳用ハ先年ニ自解も有之ハ草稿有
ク再書ル人ハ新ニ書之同月七日より廿七日迄
の間十二ヶ日の間ニ陣場ニ番頭ニ毛自解書ク九月廿七日
より十月朔日迄の内十八日の間ニ小役人ニ毛自解書
ク九月の末三ヶ日の間城内ニ前後篇の拳用ル仕
享保七壬寅年二月九日より廿七日迄の内八ヶ日の間ニ
主将ニ毛自解書ク同月廿九日より三月七日迄の内

七ヶ日の間ニ幼年ニ士ニ毛自解書ク前後篇成ル三月
九日より十六日迄の内廿ヶ日の間ニ序跋等ク一毛書
於平此筆力の用ル日数二百四十ヶ日ト云ヘ共此書の者
ニ心力ル用ル日ハ七ヶ年来ニ絶ク故ニ毛ル
ル記ス事のなり

一全部成テ十九冊ニ墨附ク総数ル記

諸士ニ毛自解　百二十七葉
使番ニ毛自解　八十一葉
武者奉行ニ毛自解　四十四葉
諸ク旗奉行ニ毛自解　五十八葉
鑓長柄奉行ニ毛自解　四十八葉

国立国会図書館　タイトル『十役之抄 19巻』 請求記号 848-189
ガラス使用

同付横目ゟ覚自解　四十葉
徒頭中間ゟ覚自解　四十五葉
組頭ゟ覚自解　百十四葉
足軽大将ゟ覚自解　百二十壱葉
士大将ゟ覚自解　上百十九葉　下六十三葉　上下合百八十二葉
右十役ゟ抄十一覚書附合八百六十葉
兵糧方ゟ覚自解　上百四十葉　下百五十三葉　上合二百九十三葉
陣場奉行ゟ覚自解　百十五葉
小役人ゟ覚自解　上九十一葉　下七十八葉　上下合百六拾九葉
右十役ゟ抄延加之覚書附合五百七十九紙

幼者ゟ士ゟ覚自解　八十二葉
主将ゟ覚自解　百七葉
序凡例目録跋之巻　四十七葉
右十役ゟ抄前篇後篇序跋等三覚
書附合二百三十六帖
都合書附総計千六百七十五葉し

享保七壬寅年春三月中旬

有沢平武負

計之

十役之抄跋

支而有作捨命之諸士戰（戦）場代動ハ軍旅止時
なりしハ日本武士たる者の當然なりしを者勇
貪愚たる軍役ハ不及謂乎人と勤るを恥望多
少ハ其心と習作行世されたる用の業に
別て今世常稼之安と又ハ火事一名之時之火消
防之の法と定たる習ハ なきを自然と成
堂りて手出一笠の如くして一分くの勤る所
而次之用て武士成立て光陰を道義を業なり
さる程の者共武士と定メさるを武之活花無度
の役に日本大之定て後法度乃武士掌を世
しる家代世をりて生れ碧の春雪を

武備軍旅の道も父祖の治り伝へ殘人も知或者
長命の仁も多分別伝年間長を治世に心
掛の若者なり更さへ又五十年前の者治りとなん
ハ當時ハ戦場を見聞古事
作業の殘敵の殺出に対ハ
慶長元和の頃漸十業の内外なれを先ホの極老
伝代覚悟とハ多分一も
近来時心掛の先輩等老功の士乃傳伝覚書
覚書とハ或ハ傳中深ノ秘ハ人ハ不傳者
又多きし小幡勘兵衛景憲ハ甲州の産
高坂弾正忠昌信の業記を
の二書伝春日源次郎
功者ハ其傳伝関且景憲も武功
秀忠ハ古実相伝伝も関左ハ甲流の軍法
とく世ハ称ハ主門先北条氏長
家光公ハ小幡氏の傳伝中上
軍法とん世上
甲州流伝ハ又ハの傳流伝
近年に
年者ハ文盲者も小幡氏ハ甲陽の書傳中
無の祖ハ故ハ伝慶
小幡氏の傳来乃主指
と去績を
ハ秀忠ハ傳伝関小条氏長乃門人山鹿義氏

よも要り侍らし　政春も永貞の教文あり武貞か
弟祖父と故と政春の傳来を聞て又
義氏と同じく或氏長の言葉　福島傳右衛門国隆一流
附属の傳状も侍らず　於甲列流天和貞享の頃より
江都と名を東流流ハ極めて所し故と永貞
同学し　武者雑法を知らずハ初ハ乃
人もを足を物状仕らず　重類状書き傳し　於軍法
状名人と書人とハ軍法を　但序文有之　状始め物を七枚
ら法書下を下　結要本状傳へ　物の奥秘九ケ
条の切紙を　右傳ハ　於甲陽軍鑑本書　二書
ふ殊傳し　景憲而作し　三ヶ状傳　一流の
書傳状波を　の滝授と　景憲以来の免状状

波し軍配状　扱く　景憲而作し　新
り口傳状　景し　或自作の書状　門人
景憲以来の　可状なし　或状　可状の
同と傳附状　扱も　皆景
憲より相續　傳し　虚妄の傳来
所の滝授なり　或小条安房守　氏長所作　雄猛
物雄猛物士猛用法　或山鹿素行　義氏而作
の神武雄備集　武教全書　武教要録　武教本
而作乃神武小兵　等の書　近年の名家物と
いへ共　後学一人の了簡　粗軍猛
本書二書　流遠　而　
有し　軍法の　指傳来ハ　甲列流高坂

国立国会図書館　タイトル『十役之抄 19巻』 請求記号 848-189
ガラス使用

氏が箕裘たる所以なり 後生の異見を遂ひ
所を捨て流儀を知者に被しむる本末を立席を
家郷に明らかにせむ事を期者を関屋政春が心し
政春が云ふ甲列流の外近授の實流に以軍
法の勝を以て以て統を以永貞 樞密論を其
者更に書を書こうの如し此云時を今文當
世の治乱をおいて庸愚の諸武士に遵ひ事
如何しく可なるか今十役抄作を合の
高弘を武貞加列の產士に同志の輩に
少しくも武備に役を事とむと云の者
に士職役相應の覺し易しむ事に新
集して士人に関係事の無に成見むなり

伝に足を抄に傳へ次に此十役抄の中に於
士人の勤に職役へ屋敷事に傳授せ云
者に毛に大概に述に屋に此所に
要を作に此を為も無知と欲に軍に常法を
貫通一知へ事に事に乃書院を知
関に武貞の志に者に の如しを云 小

享保七壬寅年三月中二之日跋之

有澤平武貞印

十役之鈔自解之跋

一當時治世ノ諸武士ハ我可勤ノ本意ヲサヘ知者稀故ニ其常變共ニ武士ノ十ナス(キ業)ノ類ヲ寄テ論ジ之ハ十役之鈔也武負カ心ハ此自解ニ出ル是ヲ榜トメ何分ニモ武道ヲ嗜ノ端トスヘキシ

一軍役知行當リノ本元當然アリ是ヲ委知シタメ武負軍役和漢古今通解ヲ作スルシ其追加ヲナサン支ヲ思トイ(ヒ)イ(ヒ)タメ是ヲ果サス

一十役之抄ハ其一役ニ〻ノ心得類ヲ集ルシ然モ指當リヲ知ニハ足夫之抄タリ故ニ武負足夫之抄私解圖解ヲ作ヲ是ヲ明ニス

一十役之抄成トイ(ヒ)偖大小ノ手組ニテ役人多少ノ

差ニアリ此組合ス釣合ヲ知ル又ハ既永貞武田備要
鈔ヲ作スルニテ知ヘキシ

一又實戦ノ様子ハ永貞作スル甲陽軍鑑畧譜ニテ
知ヘシ地形敵合相應ノ備立シ

一又小勢多勢分合ノ術ハ永貞作スル甲陽軍鑑ノ備
拔要抄ニテ其度量戦法ニ因テノ釣合ヲ知ヘキシ猶
委セハ軍鑑本末二書通解ニ永貞委述之

一近代迄ノ戈跡ノ大綱ヲ沙汰スルニハ永貞カ作タル古来
之大將衆略譜ヨリ京都將軍家畧譜ニ至リ猶
姉川柳瀬長湫関原四戦之畧譜ヲ先雑波十
問答等ニテ知ヘキナリ
孫子三畧等ヲ沙汰セントナラハ武貞作スル孫子講詩

甲列流ノ趣ヲ以述之三畧講註ハ武貞作セ戈ハ
要スレモイマタ其戈ヲ異サス拾隊ヲ侍ノミナリ

一治世軍学ヲ沙汰スル戈ハ永貞所作ノ書物數多アリ
軍学大基ノ類シ更ニ其書ニテ知ヘシ

一甲列流軍配ノ奥秘等ハ更ニ口傳ニ知ヘキ也

一永貞作スル樞密論ニ武貞註解ヲ沙汰セント欲シモ
其功遂難シ嗚呼何レノ日ナラン

一十役之抄ニハ前件ニ述ルノ外ヲ以書之者シ其所ニ
ニ於テ自解各断ルトイヘモ猶自解ニ不足カ如キ所
アルヘキカト各其便ヲ譲リ不委ノ趣ヲ此所ニ断ル者シ
右十二件ニ断ルノ意趣ニテ十役之抄自解ヲ作スル処シ
猶座備立備畳備行列陣営城取ノ度量數称

勝方円曲直銃ノ常変進退ノ差別等ハ大小ノ繪圖
木圖土圖等ヲ以試知テ思案ユキ夫分別スルノ術ハ悉
尽シ見ントスルモ又一生涯好テナスノ中ニ自ラニ是ヲ察
知スヘキ夏ハ武負等幸ニ幼若ヨリ父永負カ好ムニ便
リ有テ不教不習カ如トイヘ氏唯馴テ自然ト見聞ニ觸
武負モ又志ヲ立ルヨリ外夏ニ替テ勤之ノ功重ルニアリ然ル
當時治世ノ幼若ノ士ハ必先武備ノ當然ヲ知猶本元
ヲ糺スニ至ルヲ以テ當勢ニ不迷ナルヘシ其手近ナル夏
ヲ導シタメ其職役ニ隨テ類ヲ寄此拙ヲ作ス万
般ヲ不尽氏志ノ立所サヘアル時ハ誠ノ武士ト賞スル
至ヘキ爲ノ揉シ武負カ曾祖有沢宋女長後越中新
川郡弓庄ニ土肥氏ト共ニ在住セシ地待ナル氏天正年間

佐々成政ノ爲ニ追落サレ土肥氏牢ト其裏ヲ共ニシテ越後
或出羽ニ漂泊シ古主ノ行末ヲ慕フ処ニ東上氏ノ爲ニ土肥
ノ家嫡ヲ断サレ其恨ヲ述テ羽列ヲ立退シヲ有故テ
賀府ヘ被召出テ子孫ヲ残シ百有余年如此成来ル処
ノ本元ヲ糺知テ家ニ示シ傳ル教戒根トメ責テ俸禄ヲ
不汚ホトノ心掛ヲナス夏ヲ願フノ中室永正德ノ年間
兩度迄重キ
君命ヲ奉ルノ後武負弥勤メ弥志ヲ立テ一府下ノ同輩
ト共ニ武備ノ本元當然ヲ不失ヲ本意ト思定ムルノ外
一念斤慮ニテモ他ヘ馳ル心ヲ以不生樂ム所多キニ因テ
幸ニ七ケ年来在金沢ニテ三四日ニ一度宛ノ勤番ノ餘
暇或同志ノ輩ト武備ヲ論弁スルノ余暇一時半

国立国会図書館　タイトル『十役之抄 19巻』 請求記号 848-189
ガラス使用

霄ノ閑隙ヲ拾テ遂ニ自解ヲ終ルヲ悦テ叙スル
處如件

時享保七壬寅年春三月十五日

有沢平武負 印

右此一巻ニハ初ニ十役之抄序文ヲ述其本文不分明
所〻ハ註辞ヲ加フ次ニ凡例ヲ奉リ猶自解ヲ作スル
処ノ凡例ニ其書法ヲ云ナリ其次第六ヲ出メ巻次或
章數ヲ云猶自解出来セルノ次第日次且墨附
ノ総計ヲ挙後ニ跋ヲ書スル且亦自解ヲ作スル
旨趣ヲ挙テ同輩同志ヲ導クノ本意ヲ述且
其始ニ十役之抄大意ヲ述終リニ武負此抄ヲ作スル
年齢ヲ附スルハ後年此抄ヲ披見ニ年来相應ノ
了智ヲ顧テ其當否ニ於テ抑揚ニ微笑ヲ快セント
欲ルノ外無他耳

紫府散人 敬書 印

右序凡例目孫跋ノ一巻ハ享保七壬寅年三月九日
始メ十一日十二日十四日十五日ニ書ク者シ
賀列金沢乾隅堀川於栖老亭作ル習軒

有澤平武負字伯述　桃水子書〻後

右十九冊之艸稿爲始筆者正德六丙申歲是歲享保改元此時武負三十五歲し今茲享保七壬寅歲武負四十一歲之時年計七ヶ年之間而作之終者之

右之十九冊雖令三度校合猶恐有誤衍落之文字仮名等多耳

有澤武右衛門
武負

右墨附四十七葉

全部十九冊之墨附

総計一千六百七十五葉し

桃水子

印

848
189

国立国会図書館　タイトル『十役之抄 19巻』 請求記号 848-189

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『十役之抄 19巻』 請求記号 848-189

ガラス使用